

副詞「多分」の史的変遷をめぐって

李 知殷

一、はじめに

本稿では、副詞「多分」を取りあげ、中世期から近代期に至るまでの変遷過程を考察することを目的とする。

現代日本語における「多分」は、話し手の推量を表し、可能性がかなり高いことを表す副詞として使われている（日本語文型辞典、1999:202）。実際の新聞記事からも、主に話し手の推量を表す内容の用例¹が多くみられる。

1 「朝日新聞オンラインデータベース」を用いて、2011年1月1日から2011年3月31日までの3ヶ月分の記事から「多分」「たぶん」を検索したところ、97件が得られた。そのうち、82件が副詞として用い、残りの15件は名詞・形容動詞、または慣用句である。

(一) A 当時の思い出はなぜか冬の日が多い。考えてみると、こた

つだ。孫息子はゲームやテレビから離れる生活で、**多分**不

満だっただろう。

「朝日新聞」2011.01.19

B 自分の前に逃げた人たちは、**たぶん**のみ込まれただろう。

「朝日新聞」2011.03.14

次の用例を見ると、「かなりの程度である」という意味を表し、形容動詞として用いられている。

*名古屋のようにマグマが噴き出てくる可能性は**多分**にある。

「朝日新聞」2011年02月22日

(一)のいずれの用例も、話し手が過去のことを回想しながら、当時の状況に基づいて事柄を推測している。さらに、いずれも推量の意を表す文末表現「だろう」と呼応することで、ある物事に対する話し手の推測の意がより強くなる。

(一) Aでは孫息子はゲームやテレビから離れる生活では不満を持っていたのではないかと推測し、(一) Bでは実際に逃げた人たちがどうなったか分からないが、話し手は(津波に)のみ込まれた可能性があることを推測している。

一方、「多分」を史的に見てみると、副詞の用法だけでなく、次のような、用法もみられる。

(二) 今生れ来る天神は果報下劣の衆生**多分**は生来す

『日蓮遺文・諫曉八幡抄(1280頃)』

(二)の「多分」は、衆生の大多数の意味を表し、名詞のように使われている。

このように、「多分」は時代につれて他の用法から副詞へ変化していたことがわかる。また、これと関連して『日本国語大辞典 第2版(以下、『日国』と称する)』(2000)には次のように記述されて

いる。

①(名)

①(形動) 数の多いこと。量の多いこと。かなりの程度であること。また、そのものやさま。多数。

②ある集団の中の多くの部分。大多数。また、ある物事の中の大部分。

②(副)

①その可能性が強いことを判断している。おおかた。多くは。十中八九。大抵。

②不確かな事柄について、こうだろうと推測する場合にいう。おそらく。

『日国』(2000)によると、「多分」の初出は平安時代の『小右記』

(982-1032)で、その用例として「上達部**多分**得件云々」をあげている。ここでは、ある集団のなかの大多数のことを表す(①②)。

そして、現代日本語のような副詞用法がみられるのは近世初期までの『虎明本狂言・柿山伏』からである。「人ならばにくひ事じゃが、**多分**からすかと思ふ」という用例をあげている。ここでは不

明なものを推測し、推量を表す文末表現「と思う」と呼応している(一)(二)。

以上、本稿では時代とともに「多分」の意味用法が拡大されたこと(『日国』一)→(二)、そして、(二)の意味から陳述性が見られること、この二点に注目し、「多分」の変遷過程をみていきたい。

研究方法は、各時代別における資料から用例を抽出する。分析にあたっては、『日国』(2000)の意味記述に基づき、形態上から分類したうえ、文脈上の意味によって再分類する。研究資料の場合は、基本的に『日本古典文学大系』(なお、「日本古典文学大系データベース」も利用する)を対象とし、近代資料においては「DRM版 太陽コーパス 雑誌『太陽』データベース」(2004)を用いる。

二、先行研究

副詞と関連して様々な研究が行われているが、そのなかで、陳述副詞を対象とした研究には小林(1980)や小池(1997)などが挙げられる。これらの研究では推量表現と呼応する副詞を対象としている。

小林(1980)では、推量の表現と関わりのある副詞「大方、おそらく、きっと、さぞ、多分」を対象に、副詞と述語部分との標準的な呼応関係を調べている。その結果、「多分」はある事柄に対する話者の単純判断を表す特徴をもち、主観的な推量文及び断定文と共起しやすく述べている。また、「多分」と述語成分との呼応関係については無秩序で無制限なものではなく、一定して決定されるのだと述べている。

小池(1997)では、推量のモダリティと共起するとされる副詞の共起関係の変化をみるため、明治期から昭和期の小説に現れた副詞「たぶん」の用例を分析している。その結果、「多分」の共起成分は「推量のモダリティ」の各形式と幅広く共起しているわけではなく、「だろう」という特定のモダリティと共起していると述べている。「多分」がモダリティ表現と共起することで、副詞固有の意味がより明確になると記述している。

従来の研究は、主に現代語を中心として、副詞と述語との呼応関係に関する研究がほとんどであり、「多分」に関する史的研究はあまりなされていない。したがって、「多分」がどのように変化してきたのか、それはどのような変化といえるのか、などについて考察する必要があると思われる。本稿では、先行研究を踏まえ、

「多分」の歴史的な変化を考察する。

三、「多分」の歴史的変遷過程

三・一 中世の資料における「多分」

今回の調査の中世資料から現れた用例の出現様相を次の表1に示した。

表1	集団(物事)の中の大部分	かなりの程度	副詞
毎月抄	2	0	0
沙石集	0	0	1
正法眼蔵随聞記	6	0	0
妻鏡	1	0	0
開目抄	0	1	0
消息文抄	0	1	0
太平記	1	0	0
能楽論集・三道	0	0	1

前節で、「多分」が『小右記』(982-1032)から「ある集団の中の

多くの部分」の意味として初出したことを述べた。今回の調査の結果を(表1)に示す。その結果、『毎月抄』(1219頃)から意味上においてある範囲のなかで占める部分が多いことを表すものが見られる。次の例(三)は百首のなかで万葉風のうたが多いということを表す。

(三)又おそろしげなるたぐひを申し侍るべし。よろしくそれは今

定め申すにをよばず、この下にて御了見候へ。この御百首に

多分古風のみえ侍るから、か様に申せば、又御退屈や候はずらめなれども、しばしはかまへてあそばすまじきにて候。

『歌論集・毎月抄』

また、鎌倉時代の仏書である『正法眼蔵随聞記』(1288頃)にも同じ意味用法が多くみられる。次の(四)は世の中の人や世を捨て

2 (表1)に示したもののほか、『梅尾明上人遺訓』から「ひたすら」という意味として使われたのがみられる。

*當初本寺に有し時、大衆群りて、勤めせし體をつくつと見て、不覺の涙を拭ふ事のみありき。十二時中、**多分**(ひたすら)徒らに紛れ過して、適佛前に望て、片時の勤めする程だにも、眞信にもなし。

た人の大多数のことを表す。(五)は世の中で、仏道を学ぶ人の大多数、(六)は国の人々の大多数、(七)は世間の人の大多数のことを表す。ここまでの全ての用例は、単に多い部分を表すのではなく、ある集団の範囲のなかでの多い部分を表す。

(四)夜話云、今、世出世間ノ人、**多分**ハ、善事ヲナシテハカマヘ

テ人ニ識レント思ヒ、惡事ヲナシテハ人ニ不被知思フ。依此内外不相應ノ事出來ル。 『正法眼蔵随聞記』

(五)俗猶「服、法ニ應ジ、言、道ニ隨ベシ。」ト云ヘリ。一切私ヲ用ルベカラズ。示云、當世學道スル人、**多分**法ヲ聞時、先好

ク領解スル由ヲ知ラレント思テ、答ノ言バノ好ラン様ヲ思フホドニ、聞クコトハ耳ヲ過ス也。 『正法眼蔵随聞記』

(六)夜話云、今此國ノ人ハ、**多分**或ハ行儀ニツケ、或ハ言語ニツケ、善惡是非、世人ノ見聞識知ヲ思フテ、其ノ事ヲナサバ人

アシク思ヒテン、其ノコトハ人ヨシト思ヒテン、内至向後マデモ執スル也。 『正法眼蔵随聞記』

(七)又云、世間ノ人、**多分**云、「學道ノ志アレドモ、世ノスエ也、人クダレリ、我根劣也。 『正法眼蔵随聞記』

そして、(八)(九)のようにかなりの程度の意を表すものも見られる。(八)は「ぬすみとつて、無理に多分に作為し、正法の色もよく、香りもよく、味わいもよいものをなくしてしまうだろう」と解釈できる。また、(九)はかなりの程度の罪が減って、少し残っているという意を表す。いずれの例の「多分」は動詞に係って、形容動詞的な用法として用いられている。

(八)是の時に、當に諸の惡比丘有つて、是の經を抄略め、分つて
多分と作し、能く正法の色香美味を減すべし。

『日蓮集・開目抄』

(九)罪多分減して少分有しが、父母千人殺たる程の大苦をうく。

『日蓮集・消息文抄』

鎌倉時代中期の『沙石集』(1279-1283頃)に副詞のような用法が見出される。「愚か者は大抵正直である」というふうに解釈でき、その可能性が強いことを表す。このような用法は室町時代の『能樂論集・三道』(1533年頃)にも現れる。(十一)の場合、「この種の能は、大半が前場(まえば)・後場(のちば)の二場に分れた構成である。」(『新編 日本古典文学全集』, p.364)と解釈している。

特に、『沙石集』の用例は『日国』(二)①から可能性の強いことを判断する意味としてあげているもの(『能樂論集・三道』)より早いのである。

(十)世間ノ嗚呼ガマシキ事故ニ、人ニカロシメラル、事ハ、罪障
ノノコル因縁也。又オコノ物ハ多分正直也。 『沙石集』
(十一)かやうの能、多分、二切れの能なり。 『能樂論集・三道』

以上、中世の資料における「多分」は、意味上に「ある集団、物事のなかの多い部分」の意を表すものがほとんどである一方、動詞に係って程度の意を表す形容動詞のような用法もみられる。また、可能性の強い判断を表すものが鎌倉時代中期から現れはじめるのである。

三・二 近世資料にみられる「多分」―陳述性の発生

中世の資料と同じく、『日本古典文学大系』を用いて近世に現れた「多分」の用例を抽出した。その結果を(表2)に示す。

表2	多分+ノ	多分+ニ	副詞
昨日は今日の物語	0	0	1
一休諸国物語	0	0	3
軽口大わらひ	0	0	1
鹿の巻筆	0	0	2
歳旦話	0	0	1
山崎與次兵衛壽の門松	0	0	1
都鄙問答	1	1	0
東海道中膝栗毛	0	1	0
春色辰巳園	0	0	1
梅屋集	0	0	1

右の〈表2〉をみると、近世に入つては「多分」に助詞が付く形も依然としてみられるなか、助詞「の」が付く連体修飾用法がみられる（「多分+の+名詞の形」）。ただし、ここでは集団のなかの多い部分の意でなく、量の多いことを表す。（十二）は「多分の」

の形であり、多量の金のことを表す。

（十二）家内ノ者ニ神ノ如ク思ハレナバ、主人ノ法ト成ベキニ、汝
ゴトキ者ハ、必ズ内ニテハ吝キモノナリ。兩親ハ是ヲ見テ、
アノ細サニテハ**多分**ノ金ハ遣フマジト思ヒ居テ、津波ニ値
タル如ク、家屋舗一度ニ取ル、時ノイタマシサヨ。

『都鄙問答』

次の（十三）（十四）のように、程度の高いことを表すものも前代に引き続きみられる。特に、助詞「に」が付いた「多分に」の形もみられるようになる。それぞれ「背く」「いらぬ」という動詞に係るもので、程度の高さを表す。

（十三）心ヲ合テ敵ヲ伐ハ士ノ道ナリ。然ルニ皆々不同心ナラバ、
「大勢ニハ背カレズ」ト云テ、主君ノ敵ヲ見遁ニシ、武士
ノ道ヲ舍ンヤ。**多分**ニ背ト云トモ、敵ヲ打ハ士ノ道ナリ。

『都鄙問答』

（十四）これゆへ湯をわかすに、たぎど**多分**にいらぬ、りかたたい
いちのすいふるなり。

『東海道中膝栗毛』

また、副詞用法の場合も、(十五)―(十七)のように、まだ文末表現と呼応しておらず、その意味も可能性の強いことを判断するものが引き続きみられる。

(十五)しかるに淺草眞福寺といふ會下寺多げでらのありしが、かの所へゆきて、山門より、「ござつた」とばかりいひて、「なにがまたござつた」といふ事を忘れていたりければ、内より小僧出て申けるは、「是はたぶん、にせ大黒舞と見へて、「なにがまた」を忘れたそふな」と思ひ、みなあきれはて、どつといふて笑ひける。『鹿の巻筆』

(十六)さる医師に尋ね候へば、此わづらひハ我等か療治にハかなひがたし、かやうの病ハつゐに医書にも見え申さず、しかれども曾名を申さねば、いしやの見立を知らるににたり、**たぶん**此わづらひハ、しやくきんといふ煩也、いか成ぎばへんじやくかかゝりたり共、おしかたかるべし、め(八才)うやくきん丸をもらひてのミ給ハ、そくじにぢすべしとをしへられけり、『一休諸国物語』

(十七)漸に月日を過せしかば、今はこの世に亡人と、あきらめる

にはあらねども、彼丹次郎へ送りし文に、懐妊を恥て身を隠す趣きを書、**多分**世を捨る文章なりけるゆへ、『春色辰巳園』

ここで注目したのは、副詞用法のうち、不確かな事柄について推測するものが現れはじめることである。さらに、推量の助動詞「う」から推量の文末表現「だろう」まで、推量を表す表現と呼応する形がはじめて見出される。少数であるが、今回の調査では、『昨日は今日の物語』(1615-1644)にはじめて現れた。(十八)は、「匹敵するほどのものでしょう」ということであり、推量の助動詞「う」と呼応している。また、(十九)では、『山崎與次兵衛壽の門松』(1718)に推量形の丁寧体の文末表現「ましよう」と呼応するものもみられる。

そして、現代日本語でよく用いられる形として、(二十)のように「多分」と文末表現「だろう」が呼応するものがみられるようになる。意味面においても不確かなことについて推量する表現である。「おくらだろう」だけで推量の意が内包されているが、副詞「多分」とともに用いたことから推量の意がより強くなる。

(十八) ぬ中より初て上りたる人、先せいくわん寺へ参り、御前なるかくを見て、さて十見事なしゆせきや、かひたりせいの字、願の字の筆せいは、**たぶん**、すかうか石すりてあらふとほめた。『昨日は今日の物語』

(十九) 欲をさへ離るればつい埒の明くこと。口惜しい此の治部右衛門浪人の身でなくばと。くいいうて恨言。**多分**今日も見えませう父さまの袖引いて。恥しめていはせたらなんぼぞい親仁さまも得心なうてなんとせう。

『山崎與次兵衛壽の門松』

(二十) そのう作者が河竹ときてゐるから、鬼に鉄棒た「そこで又ゑんまと鬼の浄るりを出したのだらう。しかしありやア**多分**おくらだらうよ。アノ一休さまが、聞きより見ておそろしき地ごくかな、トいふと、音羽屋がなんとかいつたツけなア」「いき来る人もおちざらめやハサ」 『梅屋集』

近世に入ってから、形態的な面において、助詞「の」「に」がついて名詞や形容動詞としてはっきりした用法が現れる。副詞用法では、前代からの可能性の強いことを判断するものがある一方、

不確かなことを推量する意が新たに現れる。さらに、現代日本語に近い形として「多分」と推量の文末表現が結びついて、その呼応関係によって「多分」自体がもつ推量の意味が強くなるようになる。

三二三 近代資料における「多分」——陳述副詞の定着

近代以降にみられる「多分」の用例を調べるため、「CD-ROM版 太陽コーパス 雑誌『太陽』データベース」(2007)を用いて用いることにする。

(表33)は「多分」の用法をまとめたもので、年度別にその用例数を示した。用法面において、三つにわけたが、そのうち副詞用法の「は可能性の高いことを、**＝**は推量を表し、陳述性が見られるものを表す。」

表3	多分+ノ	ノ+多分	多分+ニ	副詞	
				I	II
1895～	4	10	2	9	20
1901～	3	16	1	5	37
1909～	3	2	1	3	27
1917～	0	3	1	1	48
1925～	1	2	14	2	34

右の(表3)をみると、明治に入っても名詞や形容動詞的な用法が続いて使っており、副詞用法でも使い方が広がることがわかる。

まず、近世から現れはじめた「多分の」の形は明治に入っても依然としてみられる。(二十一)(二十二)は「多分の」の形であり、(二十一)は多量の土石を積み重ねるということ、(二十二)は大部分の時間を表す。

(二十二)多分の土石を積累すれば大山の形を成し。

(1895, 文語)

(二十二)されど普通の兒童青年は其の修むる所を以て直ちに實用に供し得べき種類の學科に多分の時間を用うるを常とす。

(1909, 文語)

また、この時期には連体修飾の「多分の」の形とともに、「名詞+の+多分」の形もみられる。その用例数をみても、連体修飾の形より多く用いる。(二十三)(二十四)は「名詞+の+多分」の形であり、(二十三)は重要工業の生産品のなかの多い部分のことを、(二十四)は自分の中で多い部分を占めている男性的な部分のことを表す。このような「名詞+の+多分」の形は主に集団や物事の中の大部分のことを表す。

(二十三) 唯此の場合に於ては重要工業の生産品の**多分**は内地の消費に充つるに止まり
(1917, 口語)

(二十四) また男性に劣らない立派な才能と勇氣がある事を示す爲に、自分の中に潜む、男性の**多分**を男性の前に充分に表現せねばならぬ。
(1925, 口語)

名詞用法とともに、以下のように「多分に」の形の形容動詞的な用法も引き続きみられる。いずれも「入っている」「支配する」という動詞に係るものである。

(二十五) 人も知る如く、十九世紀の後半期以後の文藝には社會主義的思想が**多分**に入つて居るし、
(1909, 口語)

(二十六) 然るに花では運が**多分**に支配する。
(1925, 口語)

副詞用法では、ほとんどがある事に対して推量するものが多いが、一部の例では可能性の高いことを判断するものもある。

(二十七) (二十八) はいずれも推量の文末表現と呼応し、(二十七)は「右の圖は聖母が幼ない耶蘇を膝の上に擁している美しい繪」という根拠から油絵であることを推測している。(二十八)は林さ

んは留守中である可能性が高いことを表す。

(二十七) 右の圖は聖母が幼なき耶蘇を膝の上に擁してゐる美しい繪であつたと云ふから、**多分**油絵であつたことと思ふ。
(1917, 口語)

(二十八) **多分**林さんはお留守だらうから、たゞ置いてくればいゝんだよ。
(1917, 口語)

この時期に、前節の仮定表現に続き、不確かなことを推量するものも多く見られる。仮定表現とともに用いることで推量の意味をよりはっきり發生させる。(二十九)(三十)は仮定表現「くたら」「くば」の後にくる形でありつつ、「多分」と文末表現が呼応している。

(二十九) 兼さんを味方にして親父を説附て貴ツたら**多分**親父も承知を仕様と思ふ
(1895, 口語)

(三十) 不日問題の圓滿なる解決を見るべしとの報告を領したれば、**多分**近く双方圓滿なる落着を見るならんと思ふ。
(1909, 文語)

四、様々な文末表現との呼応―近代の資料を中心に

「多分」の陳述性は近世に現れはじめ、近代になってからは呼応する文末表現の範囲が広がっていく。現代日本語で、「多分」と呼応するものは、まず、推量の「だろう」であろう。以下に現代まで続けている「多分」の代表的な呼応関係を表す。(三十一)―(三十二)はいずれも「外をぶらついて居る」「六七十名の差を以て負ける」ということを推量している。

(三十一)：ワーシンの此話で一同どツと笑ツた 如何だメリニコ

ウフは？、**多分**又外をぶらついて居るだらうな、と誰

かゞ言た (1901, 口語)

(三十二)今度は**多分**六七十名の差を以て負けるだらう。

(1909, 口語)

しかし、今回の調査から推量の「だろう」の他にも、様々な形式が用いられていることがわかった。以下、その例を記すことにする。

まず、(三十三)―(三十四)はそれぞれ「かもしれない」「にちがいない」

ない」という文末表現と呼応している。いずれの文末表現はある条件を設定し、その条件の下で、事態成立への判断が成り立つ特徴をもつ。ただ、杉村(2009)は「多分」と「にちがいない」は共起しにくい関係であると述べているが、その理由の一つとして話し手の確信度が高いことを挙げている。

(三十三)而して心中窃に想像すらく、あゝ、**多分**予は今夜は殺さ

れる歟も知れんぞ、 (1901, 口語)

(三十四)本田が死ぬ晩に私がみた夢は、**多分**右のことゝ關連したものに違ひない。 (1917, 口語)

次の(三十五)は文末表現「らしい」と呼応している。小林(1980)によると、「らしい」はある場面から認められる具体的な証拠を根拠にして状況を推量する表現と述べている。つまり、(三十五)はある根拠に基づき、「遊女屋に往た」というふうに推測できる。(三十六)は「多分」と「そうだ」の呼応がみられる例である。この場合の「そうだ」は動詞「ある」の連用形に付いた形であり、

目の前にある紅玉をみて直感的に高くみえると感ずることを表す。

(三十五) 然し新聞屋のお蓮子の話では、昨夜熊や虎の野郎、と多

分遊女屋に往たらしかつたといふ話、(省略)

(1895、口語)

(三十六) 『本當のことを云ふがいゝ。俺も嘘は云はない。多分紅

玉の方が値打がありさうだが。』『そりや、さうよ。』

(1925、口語)

以上の文末表現以外にも「べし」や「まい」などとの呼応関係もあり、このことから近代において、「多分」と呼応する文末表現が幅広くなることがわかる。

五、まとめと今後の課題

本稿では、「多分」を取り上げ、名詞・形容動詞の用法から副詞用法へと意味・用法が拡張し、さらに陳述性をもつようになる史的变化を考察した。

今回の調査をまとめると、中世から名詞・形容動詞の用法、副

詞の用法がみられるものの、形態面でははっきりしないものがほとんどであった。しかし、近世に入るとその形がはっきりするようになる。副詞の用法では、中世に可能性の高いことを判断する例がみられるようになり、近世になると不確かなことを推量しつつ、推量の文末表現と結びつく形が現れはじめた。近代になると現代日本語に近い形態や意味を表すようになり、定着していくようになった。

また、「多分」の呼応関係の推移をみると、近世に入って推量の助動詞「う」や「だろう」などとの呼応が少しみられるようになり、近代になると「だろう」との呼応を中心として他の文末形式も多用されるようになった。

今後は調査資料の範囲を広げ、その変遷をより詳しく分析していきたい。そして、「多分」とともに推量形の文末表現と呼応する副詞を取り上げ、どのような形で変化していくかについて考察したいと思う。

【参考文献】

糸川 優(1989)「陳述副詞の本質」『青山語文』19、青山学院、p

p. 102-109

工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モ

ダリテイ』, 岩波書店, pp. 161-234

小池 康(1997)「副詞の共起変化の一考察—モダリテイと共起する

副詞を中心に—」『筑波応用言語学研究』4, 筑波大学,

pp. 69-81

—— (2002)「現代日本語におけるモダリテイ副詞マサカの意味

と用法の変遷」『文芸言語研究 言語編』(42), 文芸言

語研究—筑波大学, pp. 13-36

小林幸江(1980)「推量の表現およびそれと呼応する副詞について」

『日本語学校論集』, 東京外国語大学, pp. 3-22

杉村 泰(2009)『現代日本語における蓋然性を表すモダリテイ副

詞の研究』, ひつじ書房

鈴木一彦(1959)「副詞の整理」『国語と国文学』429, 東京大学,

pp. 59-70

森山卓郎(2006)『日本語の文法3 モダリテイ』, 岩波書店

【辞典類】

『現代副詞用法事典』, 東京堂出版, 1994

『教師と学習者のための日本語文型辞典』, くろしお, 1998

『日本国語大辞典 第二版』, 小学館, 2000

【用例出典】

*データベース類

「CD-ROM版 太陽コーパス 雑誌『太陽』データベース」

「朝日新聞」オンラインデータベース

「日本古典文学大系データベース」国立国語研究所

*テキスト類

『日本古典文学大系』岩波書店

『新編 日本古典文学全集』小学館

(い・じゅうん 大学院後期課程在学学生)